

一般社団法人 日本バウビオロギー研究会 誕生へ

石川 恒夫

2025年6月2日、日本バウビオロギー研究会は、一般社団法人の認証を受けました。資料を見返しますと、2011年、2016年頃にも定款を検討し、法人への移行を検討していた記録が残っていますが、時、まだ満ちることなく、今日に至りました。ちょうど設立20年を経て、みなし法人からの一般社団法人としての戸籍を持つべき時と改めて判断し、理事会で検討のすえ、未来の世代につなげるためにも法人化を決断しました。

2005年3月5日、東京青山ドイツ文化センターにおいて、日本バウビオロギー研究会は産声をあげました。設立当初から共に歩んできた会員の皆様と法人化を



喜びつつ、それ以降、新たに会員になってくださった皆様には簡単に、歴史的経緯をご報告したいと思います。

セミナーの開催・会報誌の発刊

1997年9月から、イケダコーポレーションの故池田義次社長の依頼を受けて、高橋元さんとの共同作業から、ホルガー・ケーニッヒさんの『健康な住まいへの道ーバウビオロギーとバウエコロジー』の翻訳作業が始まりました。丸3年の作業を経て、建築資料研究社から刊行されたのは2000年3月で、著者ケーニッヒさんを招いての出版記念セミナーも開催されました。

西新宿の高橋さんの「ひと・環境計画」事務所で毎週金曜に読み合わせを行い、スタッフ濱田ゆかりさん、編集の真鍋さんと時間をかけて不明箇所をつぶしていきました。日本語としてすでに定着しているものは、それに従う必要があるだろうし、なければ新たに相応しいことばをつくらなければなりません。その見極めは大変困難なことでした。専門分野を横断する内容は多岐にわたっている



のですから。

そして、毎回校正作業のあと、高橋さん、濱田さんと食事をしながら、バウビオロギー「学会」なるものをつくろうと意気投合し、その未来を語り合いました。

高橋さんが2004年にお亡くなりになり、その一周忌の2005年に研究会は産声をあげました。爾来20年、多くの方に見守られ、励まされ、バウビオロギーをめぐる多様なテーマを定めつつセミナーを開催し、そのレポートを軸にすえた会報誌の刊行を展開していきました。セミナーはいままで74回を、会報誌は73号を数えています(2025年7月時点)。

通信教育講座バウビオロギーへ

2000年前後にすでに、翻訳の資料集め、質疑のため、IBN(当時はバウビオロギー+エコロジー研究所ノイボーエルン)との交流をはじめました。晩年のアントン・シュナイダー博士と交流を持てたことは幸いでした。ドイツではIBNによって数



十年も前から通信講座があることを知りました。そして通信教育講座のドイツ語版テキストを入手し、石川個人が受講を始め、2010年に2回のスクーリングを経て試験に合格し、Baubiologie IBNの資格を得ることができました。自分で内容を理解し、その通信教育の持続的学びを体験しなければ、日本での展開は難しいと思ったからです。そして日本語版での通信講座を2011年に開始しました。費用対効果の問題や、ドイツに準じた2年間という長い受講期間、受講費用など、周囲から懸念の声もありました。だがしかし、1期生は20名が応募されました。スタート時にはまだ完全に訳は終わっていなかったもので、出来ているものから、順序を入れ替えて配送することもありました。当時事務局の原衣代果さんと、毎晩遅くまで、テキストを流し込みレイアウトし、人数分を紙に打ち出し、製本し、発送すること2年、大変な労力でした。当時の記憶がほとんどないくらいですから。

国際交流へ

ドイツ IBN を主催者として、不定期ながら、国際バウビオロギー会議が開催され、代表からお声がけをいただき、出来る限り参加しています。バウビオロギーがいかにグローバルなものかを痛感します。メールアドレスを baubiologie.jp にすることもバウビオロギーが国際的な意味で認知され、その後ろに国の標記が用いられるように、とのことから設定しました（ドイツ de、スペイン sp、トルコ tu、など）。シックハウスや化学物質の問題は、普遍的な課題であり、健康問題はメガトレンドであることがわかります。



そしてそのような交流から、トルコ・イズミルで開始されたバウビオロギー運動にも協力を

との願いから、2019 年に国際バウビオロギーフォーラムへの参加ができませんでした。アジアの東端の日本と、西端のトルコ（イズミルは西トルコ）との出会いが生まれました（写真）。日本国内の多々ある問題とともに、国際的な視野でのバウビオロギーの重要性も今後構築していく必要があります。

海外講師の招聘

定例セミナーとともに、主にドイツから講師をお呼びする講座も幾たびか企画してきました。2011 年 3 月にヴォルフ・ディーター・ブランクさんをおよびして、軽井沢「恵みシャレー」を会場としてバウビオロギー会議を開催しました。かつて日本でドイツ語教師をしていた経験とご縁が今回の招聘理由となり、ダウジングの実践など、多くの学びがありました。ちょうど、東北の大震災の一週間前のことでした。

翌2012年12月には現IBN代表ヴィンフリート・シュナイダーさんをお招きして、BAU会議を実施しました。

さらに2015年3月にはその続編として建築意匠・都市計画の専門家クリストフ・ビヨックさんを招聘しました。どのようなアウトプットとしての建築デザインが

ありうるのか、という問いが多くあったためです。

このたび、12月にバウビオロギーにおける電磁気環境に

焦点をあてて、ドイツから測定士エリザベト・ソルトナーさんを招聘し、実践セミナーを開催します。久しぶりで、建築関係者ではないバウビオローゲをお招きするという、今までにはない企画になると思います。ご期待ください。



バウビオローゲの集い

ドイツではバウビオローゲがドイツ各地で活動し、その地での住宅（新築、改修など）の相談窓口を開設しています。1年半ごとに集会をもって、互いに研鑽を積んでいます。いままでに修了されたバウビオローゲはまだ20数名ですが、日本でも2019年からバウビオロギー通信教育講座を修了したバウビオローゲを対象とした「バウビオローゲの集い」を実施したいと、今回、理事になられた辻充孝さんの勤務する岐阜県立森林文化アカデミーの会場をお借りし、より深化したテーマでの集まりを集中して持つことになりました。アカデミーの施設そのものが魅力的であることはいまでもありません。コロナによる中断をはさんで、第2回2022年（岐阜）、第3



回2023年（岐阜）、第4回2024年（軽井沢）を実施し、目下、研究会の内的コア/エンジンを形成しつつあります。

終わりに

バウビオロギー研究会の活動は様々に拡大しつつも、目指すべき健康な住環境の創出という理念はぶれることなく、いかに認知度を高めていくかに今後の活動はかかっています。社団法人として、その充実に努めていきたいと思っています。